東洋のダヴィンチ」が熱く語る

開発型技術屋集団

ヒットとなりました。 ングラインダー」が延べ100万台を売り上げる大 機用円刃研磨具(草刈り用の電動刃を研ぐ機械)「サ 力 として創業しました。 年に初代社長である父親が旋盤 978年に、 刈払

売開始したポ ヒットがあります。それが1985年に開発・ ź です。 ータブル・エンジンスター ・ター「バッ 販

マン・エース」もそうです。 建築機械の不正燃料使用を防止する「チェッカ - ズを収集し、 先手を打った製品が多数あり 声か ま

をキャッチフレーズにしています。 弊社は全員が研究者ですから、「開発型技術屋集団」 だからと言って、

回なら偶然でもあり得ますが、 弊社には2度目

その他にも、 時代の流れを読み、 現場 0)

なく、「どんな人が、 社 訪

主力商品 「バッテリカ

N.

Ш

Ш

次の商品のヒントがあると考えていました。「困りごと」を聞いて回ったのです。困りごとには機械、新潟では稲の育苗箱の洗浄機など日本各地の を名刺代わりにして、 開発のため全国行脚を始めました。売れている商品 ように売れていましたが、 私が入社した当時「サングラインダー」が、 青森ではニンニクの根を切る 数年先を見越して、 商品 飛ぶ

試しで、皆さしゞかかるわけがない」と一笑と声をかけたのです。「そ

「そんな小さなバ

ッ テリ

で

笑に付されましたが、

物

は つ

積んでありましたから、「これでかかるでしょう が「トラクター られました。私の車にはいつも予備のバッテリ 熊本の阿蘇で農協に立ち寄ったとき、 ・のエンジンがかからない」と困ってお 地元の方 が

てみたら、

があれば、故障の際、

急な呼び出しに走る必要がなく

農協の方にしてみれば、各農家に予備のバッテリ

皆さんがあきらめて帰った後に実際にや

なんとエンジンがかかったのです。

問

を探究して製品に反映しています 自分たちが作りたいモノをただ作っているわけでは 三晃精機 株式会社 どんな状況で使うモノなのか」

「産研学連携」を積極的に進める、大和高田市の三晃 精機株式会社。農業を「ラクに楽しく」する電動運搬 車「らくらく号」の開発で、高齢化が進む地域社会に 貢献しています。らくらく農法(プロジェクト)で訪 れたトルコでは、地元紙で「東洋のダヴィンチがやっ てきた」と紹介された笹岡社長に、研究・開発にかけ る思いを伺いました。

を確信し、「バッテリカ」を開発しました。 時間を無駄にしなくて済みます。こうして私はニーズ なります。農家にとってみれば、兼業で限られた作業

が出るように、 大手建設機械メーカーのOEMを受注しました。 その後、建設機械用にもバージョンアップし、多くの 000アンペアを1分間出力することに成功しま 小さなボディ エンジンをかけるのには1分もあれば足ります。 電池内部の構造を強化。 で大きなバッテリ と同じパ その結果、 ワ

他社製品とは耐久性が大きく違うから。 間使える製品が強いのは言うまでもありませ 安くても1回でダメになってしまう製品より、 いるようで、 特許の期限が切れた今でも売れ続けているのは、 真似できないノウハウがあるのです。 真似できて 5 年

産研学から生まれた「らくらく号」

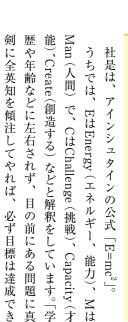
「バッテリカ」で資金的に大変余裕ができたので、



電動運搬車「らくらく号」

今度は研究開発に注力しました。大学や研究機関に

また、



してやれば、

りを強化してきました。 研究費用や特許申請費用を提供することで、 つなが

稲の花芽分化を阻害しない照明灯及び植物の花芽分イチャー」「サイエンス」にも論文が発表された「水 化を制御できる照明灯の開発」などがあり 「産研学」連携の例としては、世界の学術雑誌 *う*ます。

「らくらく農法プロジェクト」の一環で、 ンタ 親指一つで駆動でき、楽に荷物が運べる機械で、 省の委託事業として開発しました。 もその一つ。奈良女子大学や奈良県農業研究開発セ 現在最も注力している電動運搬車「らくらく号」 には弊社独自の 下市町の柿農家の皆さんと取り組んでいる 「バ ッテリ カ」を活用してい 女性や高齢者も 文部科学 バッ

取り入れ、 人のことを第一に考え、柿農家の皆さんの意見も 高齢化が進む地域社会から国際社会に向けて、 1年にわたる試験運用を行いました。 東京大学安田講堂 使

精神で、

大学柏キャンパスにて実装テスト公開することにな で電動運搬車の成果発表をし、 また、平成28年3月4日には、 今後は国内はもとより海外からの視察団にも広 (独)科学技術振興機構が電動運搬車を東京 されます 大好評を得ました。



従業員はすべて研究者

三晃精機株式会社

「実際に使う人が一番メリットを享受できる製品づくり」がモットー。 徹底して現場の声を聞く手法で、数々のユニークな製品を開発する。

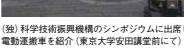
とを表しています る」と、挑戦や能力を最も重要視しているというこ

そこに作った人の人間性や、 品を作るのは当たり前 いと、本当のファンはできません。 開発や発明には心の感動が一番大事です。 。優れた技術を持っていても、 会社としての魅力がな 良い 製

のではなくて、皆ががんばっているから「10人でで きる」ということなのです。それぞれが得意分野の 弊社の従業員は10人ですが、「10人しかいない

となっていると思います。 研究を続けながら、商品開発にあたっては同じベク トルに力が結集する。これが三晃精機の大きな魅力 社会に善意で貢献できているか。 今後も良い製品を提供し続け 「三方良し」 ったいと思 いの

(独) 科学技術振興機構のシンポジウムに出席して、



バッテリカ